

<研究ノート>

博物館における評価 —Rounds 論文の検討

守 井 典 子
(国立科学博物館)

「評価は良いことで、積極的にやるべき」とする言説が支配的である状況は、おそらく日本もアメリカも同じであろう。少なくとも日本では、税金を使って運営されている施設に対して説明責任や情報公開、業務の効率化を強く求めていこうとする時代の流れの中にあって、評価そのものに関する批判的な意見——例えば「評価は不可能である」、「手間がかかりすぎる」、「やっても意味がない」等々——は、あまり表面化しない。現在はまだ、まず試行ありきという段階にあるように思われるが⁽¹⁾、アメリカでは日本よりも評価活動の蓄積が進んでいるためか、事情がやや異なるようである。

2001年の夏、アメリカ博物館協会(American Association of Museums。以下AAMと記す)の機関誌 *Museum News* はミズーリ大学の Jay Rounds による論文 *Measure for Measure: Purpose and problems in evaluating exhibitions* を掲載した⁽²⁾。タイトルを日本語にすると「測定のための測定」、「尺度のための尺度」、あるいは「評価のための評価」というところか。タイトルもさることながら内容も刺激的で、博物館の現場で評価に関わる人々から様々な反応を引き出す結果となった。

本稿では、この論文の紹介と検討を軸として、評価をめぐるアメリカの博物館の状況を整理することにより、日本の博物館や他の社会教育施設における評価について考える際の材料を提供したい。

1. アメリカの博物館と評価

日本で我々が一般的に「評価」という言葉を用いるように、アメリカでは「エバリュエーション」(evaluation)という言葉を用いるようである。博物館の世界では、「エバリュエーション」は展示やその他の教育プログラムを評価する、いわゆる事業評価を指して用いるのが一般的である。

博物館の諸機能の中でもとくに教育機能を重視するアメリカでは、1920年代頃から来館者に焦点をあてた研究が行われてきた。1970年代には統計的データの収集が盛んになり、来館者に関する様々なデータを教育プログラムの向上のために活用する方法が模索された。そして、学校教育の分野における評価論の影響を受けながら、3種類の評価方法が定着するに至った。すなわち、事前評価(front-end evaluation)、形成的評価(formative evaluation)、総括的評価(summative evaluation)の3つである。これらは教育プログラムの企画・開発から実施に至る作業の流れに対応しており(図1)、プログラムの目標を達成するための様々な意思決定に必要な情報を提供するとともに、最終的には目標達成の度合いやプログラムの有効性の判定に用いられる⁽³⁾。

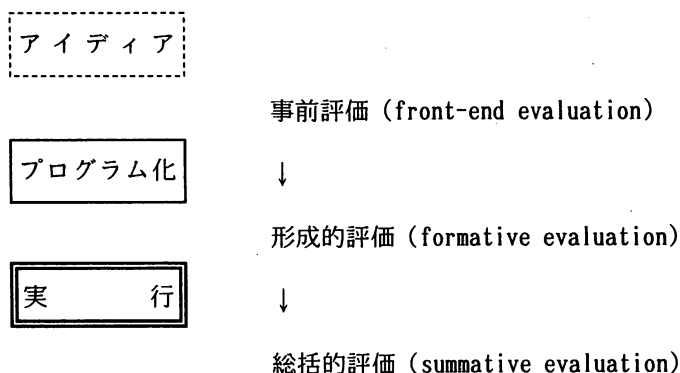


図1 教育プログラムの流れと評価の種類

本稿で紹介する Rounds 論文は、この3つのうちから総括的評価だけを取り上げたものであるが、その検討にはいる前に、アメリカの博物館における評価の状況について、若干の補足説明をしておきたい。

アメリカでは、このような教育プログラムのレベルでの評価活動が盛んに行われているが、これには博物館の運営形態が大きく関係している。アメリカの博物館は NPO として独立した運営を行っている場合が多く、教育事業に係る予算は通常、プログラム単位で政府（連邦政府や州政府、郡、市など）やその外郭団体、あるいは民間の助成団体からの補助金などによって賄われる⁽⁴⁾。補助金を受ける際の条件としてプログラムの評価が義務づけられることが多いため、結果として評価活動も盛んになっていると考えられる。日本のように、地方自治体によって博物館が運営されているために、博物館の事業全体が行政サービスの一部と見なされ施設運営そのものが評価の対象とされる状況は、アメリカではまず考えられないと言ってよいだろう。

ただし、連邦政府に予算のほとんどを依存しているスミソニアン協会や国立公園機構（National Park Service）などは例外で、1993 年に制定された法律 Government Performance Result Act（以下 GPRA と記す）により、業績測定（performance measurement）のアプローチを導入するよう義務づけられている。例えば、国立公園の一つ、ミズーリ州セントルイスで西部開拓時代を象徴するゲートウェイ・アーチや博物館などを管理する国立ジェファソン記念公園では、定量的で測定可能なアウトカムをゴールとして掲げ、その達成のために戦略計画（strategic plan）を策定し、年度ごとに実績を報告している。戦略計画には、施設のミッションや長期的ゴールと、ゴール達成の方法やプログラム評価の方法などを盛り込むことが求められている⁽⁵⁾。

このような戦略計画とアウトカム・ゴールによる予算管理の方法を博物館評価の一種と見なすことはできる。とはいえ、連邦政府の博物館だけがこの種の評価にさらされているわけではない。NPO として運営されている博物館の多くは、義務ではなくて資金調達上の必要に迫られて、GPRA 以前から戦略計画を策定し活用していることを忘れてはならない。特に、民間企業などからの寄付を募る場合、戦略計画が重要な役割を担うことが多く、計画策定のために外部のコンサルタントを起用する場合も少なくないようだ。

そして、もう一つ異なる種類の評価がアメリカには存在する。AAM によって実施されているアクレディテーション(基準認定)の事業である。これは、大学の基準認定の枠組みをモデルとして 1971 年から続けられている事業で、セルフ・スタディ(自己点検・評価)とピア・レビュー(同業の第三者による評価)を基本とする。AAM に加盟する博物館が、費用を自己負担して自発的に参加するもので、その博物館が自らの使命や目標をどの程度達成できているかという観点から、あらゆる事業を 1 年がかりで自己評価し、さらにピア・レビューアーの現地視察と審査を経て最終的な判定が行われることになっている⁽⁶⁾。認定を受けることで、その館が高いスタンダードをクリアした施設であることを周囲に対して示すことができるわけであるが、例えば見返りとして政府からの予算配分が約束されるというような具体的なメリットは全く用意されていない。

AAM 以外の専門的な団体(例えば American Zoo and Aquarium Association や Association of Science-Technology Centers など)では、施設会員のためのスタンダードを設けて、厳しい入会審査を行っているところもあるが、このような審査もアクレディテーションの一種であり、博物館を評価する仕組みの一つと見なすことができるだろう。あるいは、博物館活動の様々な局面に係わって各種の専門団体が存在するが、そうした団体がそれぞれに独自のスタンダードを設けて公表している⁽⁷⁾。それをクリアしたかどうかを第三者的に審査したり判定したりする制度がなくても、個々の博物館における自己点検・評価に十分に役立つものであり、活動の質が担保されていることを対外的に説明しようとする際に大きく貢献しているものと考えられる。

先に挙げた国立ジェファソン記念公園では、博物館としての諸活動の質を保証するものとして AAM のアクレディテーションを受けている。個々のプログラムについても参加者や関係者にアンケート調査を行うなどして入念な事業評価を行っている。アクレディテーションにおいては、プログラムごとに評価を実施することが重視されているからであるが、それだけではない。事業評価は他方で、GPRA に対応して策定される戦略計画や年次報告においても必要となる作業であり、良い評価結果は大いに役立つのである。

このように、博物館を評価するための「尺度」は、複数存在している。なかには、基準認定事業のように、評価対象に合わせてかなり自由に伸び縮み

するように見える「尺度」もある。博物館は、状況に応じて戦略的に評価方法を選択し、その結果を対社会的な説明や運営予算の確保に活かしていると考えられる。

2. アウトカム評価の前提にあるもの

さて、Rounds が論文 *Measure for Measure* で批判の対象としたのは、展示に関する総括的評価である。彼は「アウトカムに焦点をあてた古典的な評価モデル」と表現する⁽⁸⁾。すなわち、教育的ゴールを設定してからそれを達成するための展示を組み立て、結果としてゴールが達成されたかどうかを確認するような種類の評価である。この種の評価を必要とするのは、博物館の管理職や政治家、補助金を出す側の担当者（プログラム・オフィサー）といった人々であり、公的な資金への見返りとして博物館に対社会的な存在価値を証明するよう求めているのだという。

Rounds は、このアウトカム評価の論理は、5つの前提の上に成り立っていると考える。すなわち、①目的の先在性、②手法の確実性、③アウトカムの認識可能性、④アウトカムの解釈可能性、⑤評価結果の有用性、の5つである。

言い換えるならば、ゴールが決まっていて、ゴールを達成できるのはどのようなアクションであるかが判っていること。そして、アクションを行った後はアウトカムを正確に観察し、それによって本当にゴールが達成されたことを説明できること。さらには、期待した成果が得られなかった場合には、評価結果をどのように活用すればもっと効果的にゴールを達成しうような別の手法を選択できるかが判っていること。アウトカム評価のモデルは以上のような状況を暗黙のうちに前提としているのだという。

しかし、Rounds の見るところ、今日のアメリカの博物館でこれらの前提がすべて満たされることはほとんど無い。むしろ、1つか2つの前提が満たされないまま古典的な評価のモデルを用いて問題が生じているのではないかというのが彼の出張の出発点である。そこで彼は、上記の①と②、すなわち、目的がすでに存在しており、目的のためにアクションが選択される、という

前提に的を絞って、前提そのものの妥当性を問い直すような状況を敢えて仮定し、検証を試みたということである。

Rounds が仮定した状況は以下の6つである。

- ①ゴールがはっきりしているにもかかわらず、それらが達成されたかどうかを測定できない場合
- ②ゴールがはっきりしているにもかかわらず、様々な要素が混在していて、すべてを同時には測定できない場合
- ③ゴールがあっても、良いゴールかどうか証明できない場合
- ④ゴールがあっても、それらの性質上、評価の方法論に馴染まない場合
- ⑤ゴールがあるのかもしれないが、はっきりと表現できない場合
- ⑥新しいゴールを発見する必要がある場合

次に、これらの状況について少し整理を加えながら紹介する。

3. Rounds の主張

(1) ゴールを複数の具体的な目標に置き換えることは可能か

Rounds が仮定した第一の状況は、次のようなものである。博物館等の教育機関では、例えば「高度に教育された人間を育むことに貢献する」(to help produce highly educated human beings)といったゴールが掲げられることがある。抽象的ではあるが明確なゴールである。しかし、古典的な評価の方法論に依ると、このようなゴールは測定に適さないとして、測定可能にするために、もっと小さくて具体的な、複数の目標(objectives)に分解するように求められる。例えば、教育された状態を示すものとしては、特定の事実を学習するとか、テストに合格するとか、カリキュラムを修了するというような目標である。

こうしたゴールの明確化の作業は、展示評価においても重要なものとされている。しかし、本来あったゴールと、一連の目標は、まったく等価と言えるのだろうか。Rounds が紹介するように、例えば自然史系の博物館で「来館者が展示ホールにある生物の名前を3つ言うことができ、それぞれの生物について事実を1つでも指摘することができる」ことをキー・ゴールとして展

示評価が行われる。ゴールの明確化というステップを踏まえて実施された調査研究によって有益な結論が多く導き出されていることを Rounds は決して否定しないが、ゴールの明確化に向けた努力は、時として貧困な教育観の露呈という結果に終わることにもあるという。

もっと言えば、先述したような抽象度の高いゴールは、それ自体で完結した、適切かつ正確な表現である。そのエッセンスを全く損なわずに複数の具体的な目標に変換することは不可能ではないか、というのが Rounds の見方である。古典的なモデルに依拠したエバリュエーションでは、測定に向いているというだけの理由で我々に真のゴールを忘れさせ、粗悪なゴールで我慢させようとする力が働くとしたら、優先順位としては全く逆転してしまっている、と Rounds は厳しく批判する。

(2) 測定によって明らかにされるもの／隠されるもの

Rounds が仮定した第二の状況は、古典的な評価方法に内在するバイアスを明らかにするためのものである。例えば、博物館の展示室という場所では、複数のアクションが同時に行われる上に、一つのアクションは複数の目的を持っていることが多い。したがって、そこから生み出されるアウトカムは決して一つではない。具体的な知識や技能を教えることになるかもしれないし、博物館に収益をもたらすかもしれないし、重要な文化的資源を保存することになるかもしれないし、コミュニティの文化度を向上させるかもしれないし、民主主義を強化することになるかもしれない。

しかし、古典的な評価方法は、アウトカムのすべてを明らかにしようとするものではない。特定の種類のアウトカムを測定するためになされた選択が、他の種類のアウトカムを見えなくしてしまう可能性がある、と Rounds は主張する。古典的な評価方法で生じる可能性のあるバイアスとして Rounds が挙げるものを以下に引用する。

- ・ 特定しやすいという理由で、弱い効果よりも強い効果が好まれる。
- ・ 効果をより測定しやすくするためのエネルギー量が小さくて済むという理由で、大きい効果よりも小さい効果が好まれる。
- ・ 遠く隔たった効果よりも接近している効果が好まれる。
- ・ 長期的な効果よりも短期的な効果が好まれる。

- ・簡単に測定できる効果が好まれる。
- ・意外な効果よりも予測可能な効果が好まれる。
- ・用いられた手法のうち、効果を生み出す原因となった部分が特定できない効果よりも、はっきり特定できる効果が好まれる。
- ・ミステリアスな効果よりも、簡単に解釈できる効果が好まれる。
- ・これらのバイアスによるパラドキシカルな帰結として、将来の実践のために本当の意味で為になるかもしれない評価結果よりも、役に立たない評価結果を生産するほうが好まれる。したがって、この評価方法は、誰もがすでに知っているような評価結果や、プログラムの手法における単純で些細な事柄に関する評価結果を生産する傾向にある⁽⁹⁾。

そもそも、すべてのアウトカムを明らかにしようとしていない上に、測定には以上のように多くのバイアスがかかる可能性があるため、結果として、測定された事柄が測定されなかった事柄よりも重要であるとは言い切れない、というのが Rounds の主張である。さらに、簡単に測定できる物事への過信が、別のところで生じている有害な効果を覆い隠してしまう可能性も指摘している。

(3) ゴールの価値と性質

Rounds が想定した第三、第四の状況はゴールの価値や性質に関わるものである。

第三の「ゴールがあっても、良いゴールかどうか証明できない」状況について、Rounds の指摘を要約すると次のようになる。そもそも評価とは、博物館の事業が本当に価値のあるものかどうかを証明しようとして行われるはずであるが、それにはゴールの達成を証明するだけでは不十分である。そのゴールに達成するだけの価値があるのかどうかを証明できなければ意味がないのではないかと。ところが、ゴールの価値を問題にするための手続きを、古典的な評価モデルは持っていない。博物館が社会の大切な一員であることの証明には、アウトカム評価の実施だけでは済まされない。別のプロセスが必要であることを忘れてはいけない。

また、第四の「ゴールがあっても、それらの性質上、評価の方法論に馴染まない」状況として、古典的な評価モデルでは捕捉しきれない性質のゴール

やアウトカムが存在する可能性を指摘している。例えば、ガードナーの多重知能の理論を引き合いに出して、この理論が来館者研究の分野では大いに活用されているにもかかわらず、古典的な評価モデルでは、ゴールは言語的知性と論理・数学的知性だけ（すなわち、言葉と数字だけ）によって規定されているため、他の知性の観点からアウトカムを観察することができない状態になっているという。

（４）ゴールを定めず行動することの意義

さらに、Rounds は第五の「ゴールがあるのかもしれないが、はっきりと表現できない場合」や第六の「新しいゴールを発見する必要がある場合」を想定し、ゴールを定めず行動することの意義を説く。

将来のことを予測するのは難しく、我々はいつも判断に迷っているのが実情である。古典的な評価モデルのもとでは、ゴールが特定できないために行動できなくなってしまうたり、あるいは、とりあえず思いついた貧弱なゴールに即して結果を評価するよう求められるため、もっと大切なアウトカムの存在を見逃す可能性があるという。良い結果が得られ得ると直感的に感じることにについては、ゴールを明確に表現できなくとも、とにかく行動して結果を後から解釈するしかないのではないかと Rounds は問いかける。

また、現実問題として、既存のゴールは絶え間のない変化にさらされている。古典的な評価モデルの下では、合理的なゴールを掲げにくい行動——それゆえに新しいゴールの発見に結びつくかもしれない行動が制約されてしまうため、博物館にとっては大きな問題である、というのが Rounds の主張である。

Rounds は、資金調達との関係などからアウトカム評価の要求を退けることは現状では困難であると認識している。せめて、アウトカム評価が正しく機能する条件を理解し、条件が揃わない場合には、既存のゴールの達成に関する評価よりも、新しいゴールの発見を促進するような評価のために努力を尽くしてほしいと述べて論文を締めくくっている。

4. Rounds 論文に対する反応

Rounds 論文の掲載誌である *Museum News* には、読者から寄せられた意見や感想などを紹介する Letters というコーナーが設けられている。普段から活発に利用されており、主だった論文に対しては必ず何らかのリアクションが見られるのだが、Rounds 論文に関しては、やや異例とも言える大きな反応が見られた。

Rounds 論文が掲載されたのは 2001 年の 7・8 月号であるが、まず、11・12 月号の Letters 欄に、博物館の経営コンサルタントを生業とする Will Phillips からの意見が掲載された。2002 年 1・2 月号には、Randi Korn や Minda Borun, John Falk といった、博物館の評価や来館者調査の第一線で活躍する研究者ら 5 人の連名で、Rounds 論文を徹底的に批判する文章が掲載されるとともに、Rounds 本人にも反論の機会が与えられた。さらに 2002 年 3・4 月号には、半世紀以上にわたって博物館評価の取り組みをリードしてきた斯界の大御所 Harris Shettel が評価に対する今も衰えぬ情熱を綴った文章が掲載されて、一連のやりとりによりやく幕が降ろされた。

Rounds 論文が引き起こしたこれらの反応には、論争と呼びうるような論理の応酬は見られない。むしろ、Rounds 論文を契機としつつ、それぞれの思惑を持って持論を展開したという印象を受ける。しかし、だからこそ、アメリカにおける博物館評価の現状を垣間見せるものであり、大変に興味深い。

例えば、Will Phillips は、Rounds 論文が「現在行われている分析的で定量的なエバリュエーションに反対する最も強力な主張の一つ」であると述べ、200 年を超える長寿企業は短期的な利益に拘らないという経営学的知見を紹介して Rounds を擁護する⁽¹⁰⁾。さらには、アリストテレスを援用して、定量的で分析的なエバリュエーションはロゴスの世界に属するとして、エートスやパトスの軽視を嘆いてみせるが、結論としては、「エバリュエーションそのものには反対しないが、もっと多様性があったもよい」というような、当たり障りのない意見を述べているにすぎない。

悪意をもってすれば、Letters 欄を借りての宣伝行為と見ることもできる

が、本稿としては、アメリカの博物館評価において経営コンサルタントがある一定の役割を果たしているという事実に注目したい。アメリカでは、ここ20年ほどの間に外部の専門的なコンサルタントに対する博物館側のニーズが増大しており、コンピュータ・システムの構築やコレクションに関する調査技術、マーケティングやマネージメントなどの領域でコンサルタントを活用する例が目立っている⁽¹¹⁾。コンサルティング会社にとっては、博物館は重要なマーケットである。新しい評価手法の開発に対して前向きな姿勢を見せて今後のビジネスチャンスを探ることは、当然のことかもしれない。

これとは対照的に、5人のエバリュエーターたちの連名による文章は、Evaluating "Measure"（「尺度」の評価を）という見出しが示すように、Roundsが行った批判について再検討の必要性を訴えるものである⁽¹²⁾。彼らは、博物館界でエバリュエーターと称される人々のなかでもリーダー的存在であるが、エバリュエーション・コミュニティの一員としてRoundsの間違いを正したいとして、徹底批判の構えを見せる。しかし、彼らの指摘はきわめて表面的であり、むしろ彼らの読解力に問題があるような印象を与える。

例えば、彼らはRounds論文が初期評価や形成的評価を軽視しているとするが、そもそもRoundsは、それら新しい形態の評価が博物館活動を改善する上できわめて有用であるとの認識を示した上で、それにもかかわらず古典的なアウトカムモデルが、意思決定に関わる人々によって依然として好まれる状況を問題視したのではなかったか。あるいは、Roundsが来館者変数と展示変数を混同していると指摘しているが、Roundsが批判の対象としたのは評価の具体的な技術ではなく、方法論そのものが無自覚のうちに前提としているような部分であったはずである。彼らはまるで、エバリュエーターとしての自分たちの仕事ぶりを非難されたかのように、Roundsに対して徹底抗戦の姿勢を見せるが、全くの過剰防衛となっている。

では、Rounds論文の本質はどこにあったのだろうか。

彼らの批判に対してRoundsは、自分の論文は「古典的な総括的評価のモデルは、特定の条件が重なった場合にしか役立たないことを論じた」ものであり、むしろ、そうした古典的な評価を実践させようとするプレッシャーからエバリュエーターたちを解放したかったのだという⁽¹³⁾。彼は次のように説明する。「オールド・スタイルの総括的評価を求めるプレッシャーの出所は、外

部の助成団体や官僚、場合によっては民間企業から採用されて、来館者の体験の本質に関わる最新の研究成果をまったく理解していない博物館の管理職だったりする。(中略)これらの圧力に対して抵抗することを個々のエバリュエーターや個々の博物館に期待することは現実的ではない。博物館界全体として取り組まなければならない問題である。(中略)意義深いエバリュエーションの調査研究を擁護しようとした私の意図を、Kalata らが、これほど徹底的に誤解したことは不幸としか言いようがない。」⁽¹⁴⁾

改めてエバリュエーターたちの批判文を読み返してみると、彼らの批判が的はずれなものであることが判るが、他方で、彼らが置かれている状況を思うと痛々しささえ感じられてくる。エバリュエーターもまた、評価を依頼されて仕事をする人々であり、自由勝手に評価の作業をすることなどありえない。むしろ、優秀なエバリュエーターほど、Rounds の問いかけに苛立ちを覚えるのかもしれない。

そして、この見事にすれ違った対話は、最終的には、「評価を怖れないで」と冠された Harris Shettle の投稿によって収束する⁽¹⁵⁾。

彼はまず、自分が30年以上にわたって評価活動に関わってきたことや、自分の研究が批判された経験を紹介しつつ、それでも博物館界は「真に教育的な価値を持った展示とプログラムを提供することに長期的に取り組むために、評価を通じてアカウンタブルな状態が保たれることを望んでいたと思う」と述懐する⁽¹⁶⁾。経歴に裏付けられたそれは、非常に説得力をもって響く。長期的にみるとエバリュエーションは博物館の健全性に悪影響を及ぼすというRoundsの主張に対しては、その例をせめて一つでいいから挙げて欲しかったとし、結局のところRoundsの論文は「精緻に仕組まれた思考実験」であって、結論ははじめから用意されていたと厳しく批判している⁽¹⁷⁾。

彼の願いは、タイトル通り、Rounds 論文のせいでエバリュエーションを怖れる人がないように、ということに尽きている。博物館における評価活動という領域を開拓してきた人物の、信仰にも似た全幅の信頼によって、一連の論争に幕が降ろされた格好となっている。

5. おわりに

Rounds が批判したのは、本人が二度にわたって述べているように、展示に関する旧来の総括的評価のモデルである。目的が定まっていて、それを達成するためにアクションが選択されるという暗黙の前提を彼は徹底的に疑ったわけであるが、他の種類の評価に向けて同じ疑問を発することもあながち不可能ではないだろう。

先述したアメリカの博物館における評価の状況を考えると、複数の方法が存在しているとはいえ、例えば、GPRA によって義務づけられた戦略計画の策定では、ミッションを起点として長期的ゴールや戦略が定め、アウトカムを測定することとなっている。あるいは、博物館協会の基準認定では、使命や目標をどの程度達成できているかという観点から、自己評価とピア・レビューが行われる。使命が複数のゴールへとブレイクダウンされ、それぞれについて達成状況が定量的に測定されるという構造を持つものについては、Rounds の指摘を適用する余地はあるだろう。

また、ミッションやゴールや計画など、自らが設定した目的に即して結果を論じるという構造に、アメリカ的なフェア・プレーの精神を見ることもできるが、公的資金の提供に対しては、やはり、対社会的な価値の証明が必要である。博物館が行政サービスの一部となっている日本の状況の是非は別としても、公的な資金を受けている施設には、一定程度のフォーマルな評価が必要なのであり、その場合の評価のスタイルは、Rounds が指摘するように多くの問題を孕んでいるとしても、施設が自ら設定した目的に即したものとなるのが妥当なところであろう。

とはいえ、ただ説明すればよい、効果が証明できればよい、ということではないはずである。人々に理解し、実感してもらってはじめて説明責任を果たしたことになる。日本の国立の博物館施設 8 館は平成 13 年度から独立行政法人に移行し、文部科学大臣が示した中期目標を達成するために、中期計画を策定し、年度ごとに達成状況についての評価を受けることとなっている。目標がブレイクダウンされていく構造からすると、Rounds の指摘に沿って検

証を試みることは可能かもしれない。また、この独立行政法人の評価制度は、評価の客観的かつ厳正な実施を確保することが重要するものであるが⁽¹⁸⁾、評価の最終的な目的がどこにあるのか、それによって国民に対する説明責任を果たすことができるのかどうか、この点については Rounds の主張に反するが、目的の明確化が望まれるところである。

<注>

- (1) 例えば日本博物館協会の機関誌「博物館研究」は2003年5月に博物館の評価に関する特集号を組んでいるが、そこで紹介されている実践事例は施設の事情によって様々に異なっており、日本の博物館評価がまだ試行錯誤の段階にあることを示している。
- (2) Rounds, J., *Measure for Measure: Purpose and problems in evaluating exhibitions*, In *Museum News*, Jul/Aug, 2001, pp. 43-45, 66-67, 70-71.
- (3) 教育プログラムの評価については守井典子「博物館における評価に関する基礎研究」(『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』創刊号, 1997, pp. 31-40)において整理を行っている。
- (4) 2002年にアメリカ博物館協会が行った調査の結果によると、連邦政府や州、郡、市といった政府によって設置・管理されている博物館は全体の約23.6%であるが、その大半は、組織内部に財団法人やNPOを抱える形態になっており、完全に政府によって運営されているものは少ないという。この調査結果の概要は、Piasecki, J., *Museums in America*, In *ICOM News*, no. 55, 2002, p. 8に報告されている。詳細な報告書も出版された。AAM, *Museum Financial Information*, AAM, 2003.
- (5) *Annual Performance Plan FY2002 for Jefferson National Expansion Memorial: October 1, 2001-September 30, 2002*.
- (6) 事業の概略については以下で紹介している。博物館基準研究会「博物館の基準をめぐる考察: イギリス, アメリカの取り組みから」(『博物館研究』vol. 34, no. 9, 1999, pp. 12-16), および守井典子「アメリカ博物館協会による基準認定事業について」(博物館基準研究会『博物館基準に関する基礎研究』1999, pp. 84-93)。
- (7) 例えばAAMは、修復家やレジストラー、司書、会計担当者など、博物館運営に関わる各種専門家の団体が定めている倫理規定を網羅した冊子を編集・出版している。AAM, *Codes of Ethics and Practice of Interest to Museums*, 2000。収録されている専門団体の数は60を超える。

- (8) Rounds, J., *op. cit.*, p. 43.
- (9) *Ibid.*, p. 45.
- (10) Phillips, W., *More Useful Measure*, In *Museum News*, Nov/Dec, 2001, p. 7.
- (11) 例えば, AAM ではコンサルタントを活用するための手引きが出版されている。
AAM, *Museums and Consultants: Maximizing the Collaboration*, AAM, 1996.
- (12) Kolata, J., Korn, R., Borun, M. Folk, J. H. & Dierking, L. D., *Evaluating "Measure"*, In *Museum News*, Jan/Feb, 2002, p. 8-9.
- (13) *Jay Rounds responds*, In *Museum News*, *op. cit.*, p. 10.
- (14) *Ibid.*
- (15) Shettel, H., *No Fear of Evaluation*, In *Museum News*, Mar/Apr, 2002, p. 7, 61.
- (16) *Ibid.*, p. 7.
- (17) *Ibid.*, p. 61.
- (18) 独立行政法人評価の仕組みについては, 政策評価・独立行政法人評価委員会作成の『独立行政法人評価年報(平成14年度版)』が参照できる。